



今ご紹介いただきました枝廣淳子と申します。この時間を皆さんと一緒に過ごせることを、とても光栄に思っています。

最初に目を閉じて、自分の大切な場所について思い出してください。小さい頃過ごした場所かもしれない。大きくなってから、大切な人と行ったことのある場所かもしれません。あなたにとって大切な場所はどこでしょう？ その場所の情景を胸の中に思い浮かべてください。

その場所は、今どうなっているでしょう？ 昔と変わらない情景を、そこに見ることができるでしょうか？ そして、この先はどうでしょう？

私たち一人ひとりが、地球のどこかに自分にとって大切な場所を持ち、その場所がずっと未来へと継承されること それはとても大切なことではないでしょうか。

私が思い出す大切な場所は、小学校低学年の頃に過ごした、日本の本州の北にある小さな町の家の上です。そこは、大きな都市から電車で1時間も離れた所で、周りは田んぼや畑、山ばかりでした。春になると、山菜を採るのが楽しみでした。タラの芽という山菜を知っているでしょうか？ 春になると芽吹くタラノキの新芽を摘んで、天ぷらにしたりして食べるのですが、このタラノキはトゲがいっぱい付いていて、簡単にその芽を取ることができません。

ある日、高いトゲトゲの枝の上に、おいしそうなタラの芽が芽吹いているのを見て、一瞬、「あんな高い所



まで手は届かないし、トゲは痛いし、枝をポキンと折ってしまおうか。枝を折れば、先に付いたタラの芽は摘むことができる」と考えました。

しかし次の瞬間、もう一人の自分が、「いやいや、あのタラの芽は手に入るかもしれないけれど、枝を折っちゃったら、来年からはもう、この場所にタラの芽はできなくなっちゃう。そんなことをしちゃダメだ」と言いました。そして私は、タラノキを折るのをやめて、自分の手の届かない高い所に風に揺れているタラの芽を、見上げていたのです。

大きくなってから考えると、この時私は、「持続可能な暮らしとは何か」をおぼろげながらに悟ったような気がします。「毎年毎年、新しく成長する分は採ってもいいけど、その元本に当たる部分を傷つけてはいけない。そうしたら、ずっとタラの芽をいただくことができなくなってしまうから」と。世界中で森林面積の減少が問題になっていますが、森の木は毎年成長します。その成長した分だけを伐っていたら森林面積が減ることはありません。今は、森林の成長スピードを超えて、伐採してしまっている、つまり、利息だけではなく元本にまで手をつけてしまっているから、森林がどんどん減ってしまっているのですよね。これは持続可能ではありません。

もう少し自分の話を続けさせてください。大学に入った私は、心理学を専攻しました。自分の心の動きや、人の心理に興味があったからです。そこで勉強を積み、大学院のカウンセリングの専門過程に進みました。カウンセラーになって、社会で悩んでいる人たちの役に立ちたいと思ったからです。

カウンセリングのトレーニングを積む中で、少しずつわかってきたことがありました。「人は、自分の心と自分とのつながりが切れてしまった時、心理的な問題を抱えるのだ」ということです。本当の自分はこう思っているのに、人から期待されたり、こうしなくてはならないと思っている自分の姿がそれと違っている場合、人はストレスを感じます。そして、そのストレスが長引くと、メンタルな問題を起こしてしまう。家族との心のつながりが切れてしまった時に、家族内での問題が起きます。自分と大切なものとのつながりが取り戻せた時に、そういった問題も解決していくということを目の当たりにしたのでした。この時、私は、「つながり」がいかに大切かと言うことを学んだのでした。

カウンセラーになるトレーニングを続けていたのですが、修士課程が終わった時、私は社会に出ることを決心しました。「社会に出たことがない私が、社会の中で苦しんでいる人のカウンセリングなんかできない」と思ったからです。指導教官には、「一度社会を見てきます」と言って飛び出し、企業に就職しました。ところが世の中に出てみたら、面白いこと、勉強したいことがたくさん出てきて、今も大学には戻っていませんが……。



就職して4、5年たったあと、29歳の時、アメリカに留学する夫に付いて、8カ月の娘を連れて2年間アメリカに滞在することになりました。勤めていた会社は辞めて渡米しましたから、「2年間アメリカで過ごして日本に戻ってきた時、何か身につけていないと、日本での居場所がなくなる」と思いました。そこで、昔から苦手だった英語を一生懸命勉強しようと思ったのです。

その時の私は、ほとんど英語がしゃべれませんでした。スーパーに買い物に行っても、レジ係の「ドルセントです」が聞き取れず、何度も聞き返して怒られるのがこわかったので、いつも20ドル札や100ドル札を出すことにしていたため、家の中は小銭でいっぱいになってしまったほどです。

そんな私が英語を勉強しようとしたら、まず日常会話の練習から始めるのが当然だと思うでしょう。そして慣れてきたら少しずつ難しい文章をしゃべれるようになるだろう、と。このように、今の自分のレベルからスタートして、少しずつ英語のスキルを身につけるやり方が普通だと思います。

けれど、その時の私はちょっと変わったことを考えました。「どうせ2年間しかない。2年間、力いっぱい勉強しようと思うなら、ゴールをできるだけ高く設定したほうがいい」と思ったのです。

たとえば皆さんが、走り高跳びのバーに向かって走っていくとしましょう。高さ1mと1.5mのバーがあったとして、両方とも失敗するかもしれない。けれど、1mより1.5mのバーを目指して走っていった時のほうが、1cmでも2cmでも高く跳べるに違いない。単純にそう思ったのです。

そこで、英語の勉強で一番高い目標は何か？と考えました。それは「同時通訳じゃないか」と思いついたのです。同時通訳者は、今も通訳の方が通訳をしてくださっていますが、日本語を聞いたら同時に英語に、英語を聞いたらすぐに日本語にできる。これ以上高い英語のスキルはないんじゃないか、と思ったのです。

そこで私は、「2年間で同時通訳者になる」という、極めて無謀な目標を掲げました。その時の自分の英語のレベルから考えたら、恥ずかしくて人に言えないような高すぎる目標です。でも、誰にも言わなければ恥ずかしくない。そう思って、そう自分のゴールを設定したのでした。そして、では「同時通訳ができるようになるには何が必要か」を考えました。最終到達点から、「何があればいいのか」を少しずつ細かく分解

しながら、毎日の具体的なトレーニングを考えたのです。

同時通訳ができるには何が必要なのでしょう？
まず、聞いた英語が理解できなくてはなりません。そして、理解できた英語を日本語にできなくてはなりません。そして、この2つを同時にできるようになれば、同時通訳ができるということです。では、聞いた英語が理解できるためには、何が必要なのでしょう？
ひとつは、語彙力です。もうひとつは英語のスピードについていけるだけのリスニング力です。では、語彙力を身につけるには何をしたらいいだろう？
というように、「同時通訳ができる」という最終ゴールから、ひとつずつその要素を分解していったのです。

こうして、2年間、子どもがまだ小さかったので、学校などには通わず、自分で作成したトレーニングで練習を積みました。そして、2年後に日本に帰国してから、通訳者としての仕事を始めることができたのでした。

この時学んだのは、現状にとらわれず高いビジョンを設定することの大切さです。もし「英語があまりできないのだから、まずは日常会話から始めよう」と自分の現状からスタートしていたら、きっと同時通訳者にはなれなかったでしょう。

もう一つ学んだことは、根性に頼らず、仕組みやルールをつくることで、着実に目標に進んでいくことの大切さです。熱い気持ちで何かを始めても、当初の熱い気持ちが薄れるにつれ、やる気を失って止まったり挫折してしまうことがよくあります。それは自分の根性に頼っているからでしょう。

そうではなくて、当初の熱い気持ちが消えたあとも、淡々と着実に勉強を進めていく仕組みやルールを自分につくっておけばよいのです。そうすれば、「ああ、また止まってしまった」「ああ、また挫折してしまった」と後悔することも少なくなります。

さて、アメリカから帰国してから、勉強の仕上げとして通訳学校に行くことにしました。その通訳学校に入学する直前に、二人目の娘が生まれました。

子どもを二人育てながら、同時通訳者を目指しての勉強をどう続けるか？一番の問題は、どのように勉強の時間を捻出するかでした。子どもを寝かしつけてから勉強しようとしても、こちらも疲れているので寝てしまったり、うまくいきません。

そこである日、「自分に必要な睡眠時間は6時間なのだから、先に子どもと一緒に寝ちゃえばいい」と思いつきました。子どもと一緒に8時に寝て、子どもがぐっすり寝ている朝2時に、そっと自分だけ起き出し、家族が起きるまでの早朝の時間を自分の仕事や勉強に充てることにしたのです。こうして、朝2時に起きるといふ、変わった生活パターンが始まったのです。

最初は、通訳の仕事も少ないので、自分の興味のある環境問題の本をよく読みました。一番感銘を受けたのは『地球白書』という、レスター・ブラウンという環境オピニオンリーダーが率いる研究所の書籍でした。私は向こう見ずにも、レスター・ブラウンに手紙を出したのです。

「自分は駆け出しの通訳者・翻訳者です。環境問題に関して、何かお手伝いができることがあればご連絡下さい」と、ボランティアの売り込みをしたのです。そして数カ月後に、「今度日本に行くので、手伝ってほしい」と連絡が入り、レスター・ブラウンと出会ったのです。レスターとの出会いから、環境分野の勉強や仕事に入っていきることになったのです。

このようなさまざまな転機や人とのつながりを経て、私は現在、温暖化をはじめとする環境問題に取り組んでいます。環境問題の本質的な原因や、世界の先進事例を日本に伝えたり、逆に日本の進んだ取り組みを英語にして世界に発信したり、企業の環境への取り組みをお手伝いしたり、政府関係の委員会の委員を務めるなど、さまざまな形で環境問題に関わっています。これほど一生懸命取り組んでいるのは、早く何とかしないと、この美しい地球を未来へ継承することができないと危機感を抱いているからです。

このままの状況が続けば、地球はどうなってしまうのでしょうか？ その1つのシミュレーションをお見せしましょう。もし私たち人間がこれまで通りを続け、電気やガスやガソリンなどを好きなだけ使って、高い経済成長を求め続けていくと、地球の温度はどのようになるのでしょうか？

温度の変化は色の変化で表されます。赤くなると摂氏3、4、黄色くなると7、8、白くなると10~12上がるという感じです。私たちがこのままのやり方を続けていくとどうなるか、1950年から2100年までの温度変化のシミュレーションをご覧ください。

スクリーンに投影

このような世界にしたいくないと、皆さんも思われたと思います。これでは、命を未来へ継承することは

できません。私たちの地球を、私たちの知っている美しい地球として未来世代に手渡すことはできません。でも悲観する必要はありません。

私の好きな言葉に、アーヴィン・ラズローという人のこんな言葉があります。「未来は予測するものではない。未来は創り出すものだ」

今見ていただいたシミュレーションは、「このまま変わらないとどうなるか」という予測です。こうである必要はありません。私たちは未来を創り出すことができるのです。

では、そのためにはどうしたらよいのでしょうか。『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』という本がありますが、『環境問題の解決に必要な知恵はすべて人生の中で学びつつある』私の実感をベースに、今お見せしたシミュレーションのような世界にしないために、命を未来へ継承するために、大切だと私が信じていることを5つお話ししましょう。



1つ目は、「バックキャストでビジョンを描く」ということです。私たちは、未来へ向かって進んでいく時、目標やビジョンを掲げて、それに向かって努力を集中します。どのような目標やビジョンを掲げるのが、実はとても大切なのです。

ビジョンのつくり方には2種類あります。ひとつは現状立脚型のフォアキャストです。現在何ができるか、できないか、今どのような技術があるかと、現在できることを積み重ねて、3年後、5年後にはきっとこれぐらいできるだろうと考え、それを目標やビジョンとして設定するという考え方です。このアプローチでは、未来は過去と現在の延長線上にしか展開できません。私たちが直面している世界のように、大きな、根本的な変化が必要な時代に、このアプローチでは到底間に合わないのです。

そこで必要になってくるのが、もうひとつのビジョンのつくり方、バックキャストです。これは、現状や現在の制約要因や問題はとりあえず脇へ置いて、「すべてが思うようになったら、どのような未来にしたいのか、どうあるべきか」を自由に描くというものです。その未来のありたい姿から現状を振り返って、その間を埋めていくことにより、一番近道でビジョンに近づいていこうというのが、バックキャストのやり方です。

この2つの違いを、天気予報を例に説明しましょう。天気予報は、Weather Forecastというように、フォアキャスティングのアプローチです。「今夜前線が発達するので、明日雨が降るでしょう」という感じですね。それに対して、この状況をバックキャスティングで言うと、「明日雨を降らせるために、今夜前線が発達させましょう」となります。

私は、このバックキャスティングという考え方に、環境問題の勉強をする中で出会いました。これは、スウェーデンに本拠地を置くナチュラル・ステップという国際NGOが提唱しているアプローチです。このアプローチを聞いた時に、「あ、アメリカの2年間、私が同時通訳になると目標を掲げて勉強していたのは、バックキャスティングだったのだ」と気づきました。

その時の私の英語力は、とてもお粗末なものだったにもかかわらず、2年間で同時通訳になるという、途方もない「ありたい姿、あるべき姿」を描き、そのために何をしたらよいかを考えて実行することによって、実際に同時通訳になることができたのでした。「2年間で同時通訳ができる」という高い目標を掲げなかったら、今こうしてみなさんに英語でお話をするすることもできなかったでしょう。

国でも、バックキャスティングでビジョンをつくっている所があります。たとえばスウェーデンは、2005年に、「2020年には石油を使わない国になる」という宣言をしました。国家安全保障上、他国からの化石燃料に頼ってはいられないという考えです。バックキャスティングのアプローチで、「2020年に石油を1滴も使わない国」というビジョンを描き、そこに到達する道をさまざまな政策に落とし込み、実行しているところです。

温暖化に、バックキャスティングのアプローチを当てはめるとどうなるのでしょうか？ 言い換えると、どういう状況になれば温暖化は止まるのでしょうか？

私たちは、温暖化を止めたいと思って、こまめに電気を切るなど日々いろいろなことに気をつけて行動していますよね。どういう状況になったら温暖化が止まるのか。それをしっかり押さえておく必要があります。

地球には、森林や海など、毎年大気中から炭素を吸収する力があります。もし私たち人間が大気中に出している二酸化炭素が自然の吸収量を下回っていたら、すべて吸収されますから、温暖化は起こりません。しかし現実には、私たち人間は、地球の吸収量を超えて二酸化炭素を出し続けています。その結果、大気中に二酸化炭素が蓄積して、温暖化が進んでいるのです。

科学者の報告を見ると、毎年森林は9億トン、海は22億トンの炭素を吸収しています。合わせて31億トンです。それに対して人間は、化石燃料を燃やすことで毎年72億トンの炭素を大気中に排出しています。地球の吸収量の2倍以上を出しているのです。これでは温暖化はどんどん悪化する一方です。

バックキャスティングで、あるべき姿を考えれば、少なくとも72億トン出している炭素を、31億トン以下にする必要があります。2050年など、長期的には、世界が出す二酸化炭素は、現在の60～80%下げることがあるのです。そして、排出量が減れば吸収量も減るといつながりがあるので、目標はさらに下げていく必要があります。

個人の人生でも国の目標でも、地球全体についても、現状やその制約にしばられずに、「そもそもどうあるべきか、どうありたいか」を考えること。これが5つの大事なポイントの最初のものでした。

2つ目に必要なことは、「さまざまなつながりを見ようとする事」です。どのような状況も問題も、目に見えるものも見えないものも含めて、さまざまなつながりからできています。私たちは自分たちが想定しているつながりや自分たちに見えるつながりは考えますが、気づいていないつながりも含めて考えることが重要なのです。

1つ、実際にあった話をご紹介します。日本の南にある奄美大島には天然記念物のアマミノクロウサギが生息しています。この島には猛毒をもった蛇であるハブも生息しており、時々人が噛まれて被害が出ていました。ハブを退治しようと、人々は元々この島にはいなかったマングースを連れてきました。マングースはハブと戦う蛇として知られていて、檻の中でハブと戦うマングースの様子をテレビなどで見たことのある方もいるでしょう。

マングースを連れてくれば、ハブをやっつけて、島は平和になる、と人々は望ましいつながりを考えたのでした。ところが、実際には予想外の事態が起きました。マングースは確かに檻に入れられれば命をかけてハブと戦います。けれども、島に離されたマングースにとってみれば、別に危険なハブと戦わなくても、弱い獲物がたくさんいます。そこで、マングースはアマミノクロウサギを獲物としてどんどん食べてしまったのでした。その結果、この島では、ハブは減らない、マングースは増える、天然記念物のアマミノクロウサギは絶滅寸前、という状況になってしまったのです。

このように、私たちが何かやることは、目指していたもの以外にもさまざまな影響を与える可能性があることを忘れず、全体の構造をつながりを見ようという物の見方 システム思考と言います があらゆる人にとって大事だと思うのです。

つながりを辿って見ていくということは、時間軸を延ばすことでもあります。イロコイ族というネイティブ・アメリカンは、「何をするのにも7世代後のことを考えなさい」という掟を守っていたそうです。今日では、とても時間軸が短く、自分の周りや現在のことしか考えられなくなっています。さまざまなつながりをしっかりと考えていくこと、これをやることは、自分が想定していること以外にも、どんな影響があるんだろうか、ということも考えていくこと、時間軸を延ばして考えることが必要です。



そして3番目に大事なことは、「**仕組みをつくること、変えること**」です。人々の意識啓発によって、温暖化への取り組みを進めることは、部分的にしか成功していません。意識は高まっても、必ずしも行動に繋がるとは限らないからです。

意識があってもなくても、人々の行動変容に繋がるような仕組みをつくったり、望ましくない行動を続けさせる原因となっている仕組みを変えたりすることが大切です。そうすれば、人を責めず、自分も責めず、効果的に多くの人々の行動を望ましい方向に変えることができるからです。

アメリカの新婚夫婦のこんな話を聞いたことがあります。お嬢さんがお嫁さんの料理をするところを見ていたら、ローストビーフを作ろうと、お肉の両端を切り落としてオープンに入れていました。「なぜ両端を切り落としてオープンに入れるんだい？」と尋ねると、お嫁さんは、「さあ、どうしてかしら。実家の母がいつもそうしていたから」と答えます。2人がお嫁さんの実家に遊びに行った時、実家のお母さんがローストビーフを作ってくれました。作るところを見ていたら、やはりお肉の両端を切り落としてオープンに入れていました。お嬢さんは、実家のお母さんに聞きました。「なぜ両端を切り落としているのですか？」。お母さんはこう答えました。「さあ、なぜかしらね。うちの母がいつもそうしていたから」。

そこでお嬢さんは、実家のお母さんのお母さんの所

へ行きました。そして、「なぜローストビーフを焼くときに両端を切り落としているのですか？ あなたがそうしているからと言って、あなたの娘さんもお孫さんもそうしているのですが」と聞いたところ、おばあさんは、にこりと笑ってこう言いました。「昔はオープンが小さかったからね、両端を切り落とさないと入らなかったのよ。でも、今はオープンが大きいため、両端を切り落とすなんてことはしていないわよ」。

このように、昔そうだったから、いつもそうだから、ということで、その目的や状況が変わったにも関わらず、続けてしまっていることが、私たちの個人でも、社会にもたくさんあります。それに気がついて、新しく望ましい行動に人々を導くような仕組みを変えていくこと、つくっていくこと。これが大事です。

そして4番目は、「**本当に大切なことを大切にすること**」です。人口増加と経済の拡大が、さまざまな環境問題を引き起こしていることは、よく理解されていると思います。それでもなお、私たちの政府は、GDPは何%成長しなくてはならないと、躍起になっています。

私たちは、GDPや経済成長のために生きているのでしょうか？ 本当に大切なのはGDPや経済成長ではなく、私たちや人々、未来世代も含む、みんなの幸せではないでしょうか。GDPで測られる経済成長がみんなの幸せに繋がると信じていたからこそ、経済成長を大事にし、GDPを指標としてきました。しかし、経済成長もGDPも手段でしかありません。ところがある時期から、それらが目的化してしまいました。

GDPは、ご存じのように、どんなモノでもサービスでも、それがお金を動かせば計上されます。それが幸せに繋がっていても、繋がってなくても関係ありません。つまり、犯罪が増えれば増えるほど、環境破壊が増えれば増えるほど、GDPは増えます。なぜなら、それだけお巡りさんの時間や環境浄化のための薬品や機械が使われ、それはすべて経済活動としてカウントされるからです。でも、そんなものが増えてGDPが増えても、私たちは嬉しくありません。

かつて、ロバート・F・ケネディが同じようなことを言っていました。「GNPIは、環境保全効果や家族の健康、教育の質などを考えに入れていない。GNPIは、私たちの機知や勇気、知恵や学び、思いやりや国への献身も測ってはいない。一言で言えば、GNPIは全てを測っているが、それは人生を価値あるものにしていくもの以外の全てだ」と。

現在、GPI(Genuine Progress Indicator)という「真の進歩指標」が考案され、十数カ国で計測されています。これはGDPから、犯罪や環境破壊や家庭崩壊など「幸せに繋がっていないもの」を引き、家事やボランティアなど、「幸せに繋がっているがGDPに計上されていないもの」を経済価値に換算して計算しています。

アメリカのグラフを見ても、日本のグラフを見ても、1人当たりのGDPはどんどん増えているのに、GPIは、ある時期から停滞しており、場合によっては減りつつあります。つまり、GDPはどんどん増えても、私たちは幸せになるどころか、不幸せになりつつあるということです。

こんな中で、アジアの途上国であるブータンが、GNHという興味深いコンセプトを打ち出しています。前国王が数十年前に、「GNPよりGNHのほうが大事だ。ブータンはGNPではなく、GNHで国の進歩を測る」ということを提唱し始めたのです。GNHとはGross National Happiness。このような指標で人々の幸せを測り、ブータンが国として進歩しているかどうかを測ろうとしています。

日本を含め、各国の歴史を振り返れば、大切なことを大切にするための知恵がたくさんあるのではないかと思います。

たとえば日本の江戸時代は、鎖国をしていたため、エネルギーや食糧も外から入ることはなく、すべて自給自足をしていました。その江戸時代の260年の間、日本では戦もなく、素晴らしい文化が花開き、平和な時代が続いたのです。今、私たちが必死になって探し求めている持続可能な社会が、すでに江戸時代には実現していた、と考えることもできます。

江戸時代では、あらゆるものがリユース、リサイクルされ、暮らしや経済を支えるほとんどすべてのエネルギーは、太陽の光を浴びて光合成した植物のエネルギーでした。こうした生き方を、私たちは、経済成長

至上主義の中で捨て去り、忘れてきましたが、大事なものを本当に大事にするということの中で、それぞれの文化の中にあった持続可能な生き方を、もう一度取り戻す必要があるのではないかと思います。

そして、本当に大切なものを大切にするために大事なのが、時間のペースです。今はどんどんIT機器が出てきて、求められる反応スピードはどんどん速まっています。さまざまなことをか×かで瞬時に判断して、次々に切り分けていかないと追いつかない毎日なのです。このようにして、「瞬時に×で判断する」というパターンが身についているため、一つのことをじっくり考え抜いたり、結論を出さず、割り切らないで考え続ける力を、私たちは失いつつあるような気がします。

時にはスピードを緩めて、本当に大事なことをじっくり考えてみるのが大事ではないでしょうか？

私は仲間と一緒に、2003年から「100万人のキャンドルナイト」という活動をしています。これは、夏至と冬至の夜、2時間電気を消して、ロウソクのあかりでゆっくり過ごそうという呼びかけです。家族と、友人と、そして一人で、たった2時間でも、電気やテレビやコンピューターを消して、ロウソクの光でゆっくり過ごしてみると、普段は気がつかなくなったり、切り捨ててきた大事なことを、もう一度取り戻すことができます。こういった時間を、もっともっと大切にしていきたいと思うのです。



そして最後、5番目に大切なことは、「伝えること」です。バックカastingであるべき姿としてのビジョンを描くこと、見えないものも含めて、つながりを感じ、考え、つくり出していくこと、根性に頼らず、仕組みをつくったり、変えていくこと、本当に大切なことを大切にする。こういったことを、先に気がついた私たちが、どんどんと伝えていく必要があります。



どのような伝え方をすれば、どのように伝わるのか。効果的な伝え方をいろいろと試しながら、伝える力も鍛えていくことが大事です。

たとえば環境問題について伝えたい時、環境問題に関心のない人にどう伝えるかが、大きな課題です。私もその課題に直面しました。環境問題の本を書いても、もともと環境に関心のある人しか読んでくれない。環境に関心のない人たちに伝えるにはどうしたらいいだろう？

その考えた結果書いた本が、『朝2時起きて、なんでもできる！』という本です。この本は先ほどお話しした、2年間で同時通訳になるためにどのように英語の勉強をしたかという話や、朝2時に起きるといった変わった生活で自分の時間をつくり出す工夫など、私の個人的な話を自己実現の本として書いたものです。これはビジネス書や自己啓発書の棚に置かれますから、環境問題に関心のない人も手を伸ばしてくれます。



しかし、その本の中で2ページだけ、私が楽しそうにやっている活動の一つとして、環境問題の話が載っているのです。そして私が発行している無料のメルマガジンの面白い部分の抜粋と登録先が、さりげなく載っています。

実際、『朝2時起きて、なんでもできる！』は15万部ほど売れ、この本の読者のうち数千人が、私の環境メルマガに登録してくれました。「こんな面白いメルマガだったら読んでみよう」と思ってくれたようです。

このように、伝えたいことを前面に出すばかりではなく、時には本当に伝えたいことは隠して、違う入り口から入っていくことも大事だと私は思っています。私はこれを「トロイの木馬作戦」と呼んでいます。

今でも、伝え方をいろいろと工夫しながら、1人でも2人でも多くの方々に大事なことを一緒に考えてほしいと思って活動しています。

そして大切なのは、言葉より行動が、伝える力が大きいということです。

どんなに言葉を尽くして伝えるよりも、行動を1つでも2つでも変えていくこと、そのことこそが周りに伝える力が大きいのです。

言葉よりも行動すること そのことを最後にお伝えして、私のスピーチを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

(ワイズメンズクラブ国際協会 第69回国際大会
基調講演 2010年8月5日 於:パシフィコ横浜)

註:本稿は英語で行なわれたものを翻訳したものです。